

図版 I
「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」付図



寺戸大塚古墳出土三角縁仏獣鏡



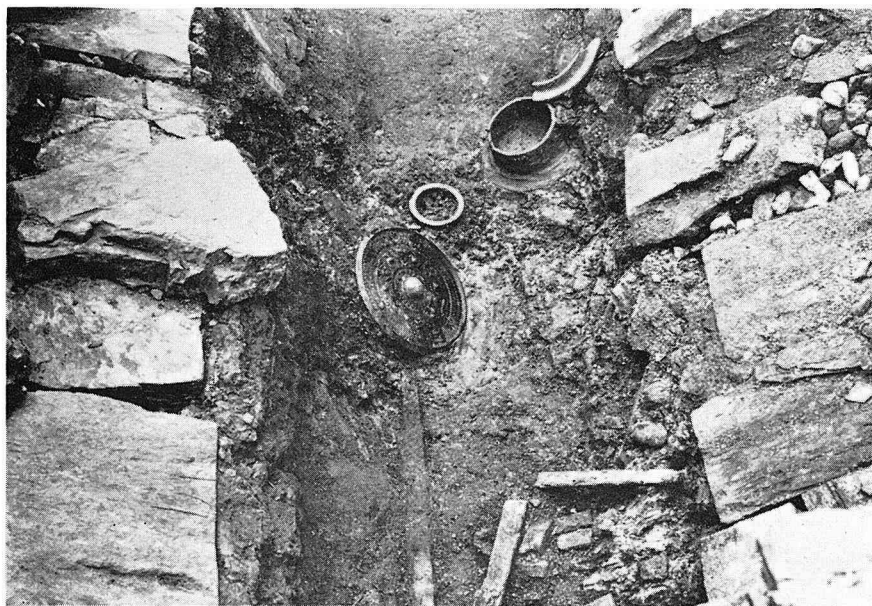
1 妙見山古墳東側くびれ部（東南から）



2 寺戸大塚古墳後円部墳丘（東南から）



1 寺戸大塚古墳石室横断面（北から）



2 寺戸大塚古墳石室内遺物出土状態（南から）



1 元稲荷古墳西側くびれ部（南から）



2 元稲荷古墳前方部埴輪区画（北から）

京都向日丘陵の前期古墳群の調査

京都大学文学部考古学研究室

向日丘陵古墳群調査団

京都大学考古学研究室は、一九六七年より七〇年まで四ヶ年にわたり、京都府乙訓郡向日丘陵に所在する前期古墳群中、妙見山古墳のくびれ部の調査、寺戸大塚古墳の後円部主体ならびに後円部墳丘の調査、元稻荷古墳前方部の調査を順次実施した。それらの概要を報告するにあたり調査にいたるまでの経過について簡単にふれておきたい。

一九六七年一月八日、乙訓の文化遺産を守る会の中山修一、小林清両氏に案内していただいて向日丘陵の古墳群を踏査した近藤と都出は、墳丘の大部分が破壊された妙見山古墳の東側斜面で一個の円筒埴輪の基底部と葺石の一部が露出しているのを認めた。

京都大学考古学研究室では、一九六六年度より「畿内に於ける前期古墳成立基盤の研究」をテーマの一つとして選んだ。その目的は前期古墳の成立に関する諸問題に対し、まず畿内に於ける前

期古墳の具体的な編年的位置づけを試み、各古墳の発掘等を伴う再検討によって古墳そのものの中に問題解明の手がかりをみつけようとするものであった。その際、過去に主体部は調査されても、ただそれだけに終っているものが多いことから、特に墳丘―葺石の検出、埴輪列の追求をもととした―ならびに主体部の構造論的な面の調査に意を用い、単に副葬品だけによる古墳群の編年ではなくして全体的な観点に立っての再検討を心がけようとした。

最初に山城地域、特に向日丘陵に分布する前期古墳群を対象として選び踏査を実施した。その結果、東方からみる乙訓の丘陵は竹の緑に覆われた姿のよい形を見せてはいても、一步丘陵内に入り個々の古墳を検討すると、竹藪の土のいれかえのため、あるいは名神高速道路工事、新幹線工事等に伴う採土作業、あるいは大規模な宅地造成によってなしくずしの破壊の前にさらされており、

なんら処置されることなく放置されている状態であった。従って当面の研究対象を向日丘陵の前期古墳にしぼり、先述した観点に立って調査を順次実施したものである。私達の調査にあたっては有形無形、多数の方々の御好意御援助をいただいた。特に中山

一 妙見山古墳くびれ部の調査

まずはじめに妙見山古墳の東側斜面に露出している埴輪の追求ならびに葺石の状態の確認と、後円部南側の断面に露出している石組が、後円部主体の排水溝の一部かどうかの検討を目的として一九六七年二月二日より三月四日まで発掘調査を実施した。調査団の構成は左記の通りである。

調査主体者 京都大学文学部考古学研究室（代表有光教一）

調査担当者 近藤喬一

調査参加者 都出比呂志、松原正毅、加藤修、小南一郎、山中一郎、西弘海、西田道彦、林敏之、増田康之。以上のほか藤丸詔八郎、桃野真晃、中村徹也の参加があった。

過去の調査

主として墳丘調査に關しての過去のデータの要点をみてみると、妙見山古墳は三回にわたって調査がおこなわれている。一九二〇

修一、小林清、橋本庄次の諸氏、宿舎を提供していただいた石塔寺武田日行、故谷口日文はじめ御家族の方々に厚く感謝の意を表する。
(近藤喬一)

年京都府史蹟調査会による第一回目の調査では、前方部正面の二段の埴輪列、後円墳頂部の埴輪列が検出され、後円部主体部には主軸に直交する特異な形の石室と凝灰岩製の組合式石棺ならびにそれに附属した東側の小石室が検出された。今回の調査とも関連する埴輪列に關する記述を参照すると、前方部正面では、最高所より内側約二・四米、外側約四・五米の位置（この場合最高所より一・五米下）に円筒埴輪列らしいものがあつた。しかし兩者ともすべて完存せず底部の断片しかないために、円筒の形、相互間の距離を知り得なかつたとある。後円墳頂部では、四個の埴輪が六〜九纏の距離をおいてならんでいた。径約三〇纏内外のものと長径四八纏、短径三〇纏の楕円形のもの交互に配置されていたといふ。^(注1)
一九四七年の第二回には西側の小石室が調査されこの際地山と封土との關係がふれられている。またくびれ部中央土取りの為に

生じたがけ面に一部水抜状の遺構が露出していたと報告されている。第三回の一九四九年、前方部で主軸直交の粘土礫が調査された。仿製の三角縁三神三獣獸帯鏡が一面出土している。^(注2)

一九二〇年に全長約一・一三米の南々東面する前方後円墳の西半部はほぼ原形を呈していたといわれるものが、一九六七年私達が調査した際には主体部を含む後円部東側の一部がわずかに残った状態で、封丘全体からみると約七分の一しか残存していなかった。

今回の調査

東側のくびれ部の葎石二段と平坦面に据えられた円筒埴輪一列、五個を明らかにし得た(図版Ⅱ―1)。墳丘が原形を推しがたいほど破壊されていることもあって十分な検討を要するが、過去のデータとも関連させて、私達が検出した上段の葎石面は、前方部の下から数えて(以下同じ)二段目の傾斜面に葎かれたものであろう。葎石の残存全長は前方部側七・二米、幅約一米、高さ〇・七米、後円部側では長さ二・二米、幅一・三米、高さ〇・六五米であった。この葎石裾に接した一段目の平坦面は、幅一・五米ありそこに鍵形に五個の円筒埴輪が配置されていた。タガ一段を含む底部の部分のみであるがすべて原位置といえよう。葎石裾と埴輪間の距離は、前方部側では二〇纏、後円部側では六〇纏である。埴輪の径は四〇纏、埴輪間の中心距離は一・四〇―一・六米、もつ

とも残りのよいもので高さ約三〇纏であった。二段目の葎石基底は前方部にむかうにつれてゆるやかな傾斜で下降する。七米の長さに対し裾部高低差は約〇・五米(くずれのために正確を期しがたい)で幅広くなる傾向がうかがえる。

一段目の斜面の葎石は、くびれ部の接点より前方部側に六米の位置から残り、長さ約一・六米、幅は一・九米、高さ〇・五米の部分だけ明らかにされた。一段目の斜面はすでに大部分破壊されており、基底の平坦面にあったかもしれない埴輪列も検出しようがなかった。二段目の葎石の葎き方を見ると、基底に長さ二五〇纏、幅一〇〇纏のかなり大きな石を斜面に沿わせてまず横におき、三角形状にとがった部分を埋めこむ。場所により異なるがそれが二〇三三段つまれた後、こぶし大の石をつめていっている。平坦面では、とくに葎石裾部と円筒埴輪の間には意識的に敷いたかと思られる小石が一部にあった。

葎石のふき方とも関連して注目すべきことは、後述される元稲荷古墳例の如く、くびれ部の葎石は後円部側を先にし、その前方部側を葎いたといった顕著な特色がみられないことである。石のつきあたり工合からみればあるいは後円部が先に葎かれ、後に前方部をつけたといったとも思われる。盛土のしかたとも関連して検討するとき、前方部の意義あるいは、意識の変化、ひいて

は前方後円墳の形式変化を考慮する上に一つの手がかりとなる点であると思う。今後検討したい。どの程度の範囲を一人の人間、あるいは一グループがうけもって作業したのか、残存状態、残存面積の問題もあつてよくわからぬ。地山面の最上面と判断される灰黒色粘土層が後円部よりつづくがくびれ部で消滅する。先ほどの前方部の形成の仕方の問題とも関連しようか。後円部には盛土をよりさらに二段の平坦部をつくると考える。

検出した平坦面には布目瓦片があつた。また葺石中より太形蛤刃石斧断片が一点出土した。

かつて第二回の調査では先述した如く、くびれ部正面のかけ面に排水溝らしいものが露出し北にのびていたとされている。今回もほぼ同様なレベル、同様な位置で石組の露出しているところがあつた。しかし検討した結果、竹藪の土の入れかえの際にまじなつた葺石をまとめてほうりこんだものと判断した。過去の調査の対象となつたものと同じのものか否かの判断に甘さがあるが、排水溝説をそのまま認めるには疑問を呈しておきたい。また地山と封土との関係についても過去のデータとの差異があり保留しておきたい。なお、一九六七年に、墳丘断面において、主体部土壇堀方の一部と思われる箇所を観察したが詳しくは本報告にゆずることとする。

(近藤喬一)

① 梅原末治「大枝村妙見山古墳の調査」『京都府史蹟勝地調査会報告』第三冊 一九二〇年

② 梅原末治「山城における古式古墳の調査」『京都府文化財調査報告書』第二冊 一九五五年

妙見山古墳出土の埴輪

原位置で検出し得た埴輪は、前方部東側列の四個、後円部南側列の一個合計五個である。すべて円筒底部十数縷を残すのみで、その上の部分は破片となつて、平坦面のそれぞれの埴輪の付近に散在していた。平坦面より下方に流れ落ちたものが多いため、全形を復原することは困難である。円筒底部の直径数値は三六〜四四縷の間に分布し、底と第一段タガとの間隔は一四〜一七縷のあいだにある。周辺に散在した破片の接合は完了していないが、朝顔形埴輪の壺の部分の破片も多数あり、また円筒埴輪の口縁端とその直下のタガとの間隔が数縷ほどの狭い特殊円筒の破片が若干ある。円筒部の透し孔は方形が最も多く、円形透し孔の一部をとどめるものが一片ある。また破片の中には円筒部の方形透し孔の横に浅い沈線で幾何学的文様を刻したものが若干ある。これらの成形は、底部第一段を幅一〇縷前後の広い粘土帯でつくり、その上に幅二〜三縷の粘土紐を巻き上げる技法が一般的である。外面は全体にタテ方向の刷毛目調整を施し、口縁部は内外面ともに

コナデ調整である。底部第一段内面はタテ方向にユビナデあるいはヘラ削りて調整している。中間部分の内面はユビナデ調整が多いが、粗雑なため粘土紐を巻き上げた際の接合部を十分に消して

二 寺戸大塚古墳後円部主体の調査

古墳の所在は、京都府乙訓郡向日町大字寺戸小字芝山二―四で後円部に相当する部分のみ寺戸区の区有地となっている。しかし前方部側および後円部西側は竹藪の土取りが相当進行しており、なしくずしの破壊をまねくおそれがあった。墳丘の原形がうかがわれたのは、調査当時後円部の東側約三分の一である。中山修一氏、寺戸区長岡崎利一氏、寺戸公民館長長谷川三五郎氏等を始めとする方々の御尽力で調査をおこない得た。

調査は一九六七年七月一日から九月一五日まで実施した。調査団の構成は左記の通りである。

調査主体者 京都大学文学部考古学研究室（代表有光教一）

調査担当者 近藤喬一

調査参加者 都出比呂志、山本忠尚、藤丸詔八郎、山中一郎、西弘海、川又正智、西田道彦、鳥居勝、小南一郎、中村徹也、稲田孝司、他に考古学研究会会員の松村博、和田晴吾、林敏之、杉

いないものが多い。成形および調整の技法の差によって、いくつかに分類できるが、胎土は、アズキ色の粒子を含む点で共通する。

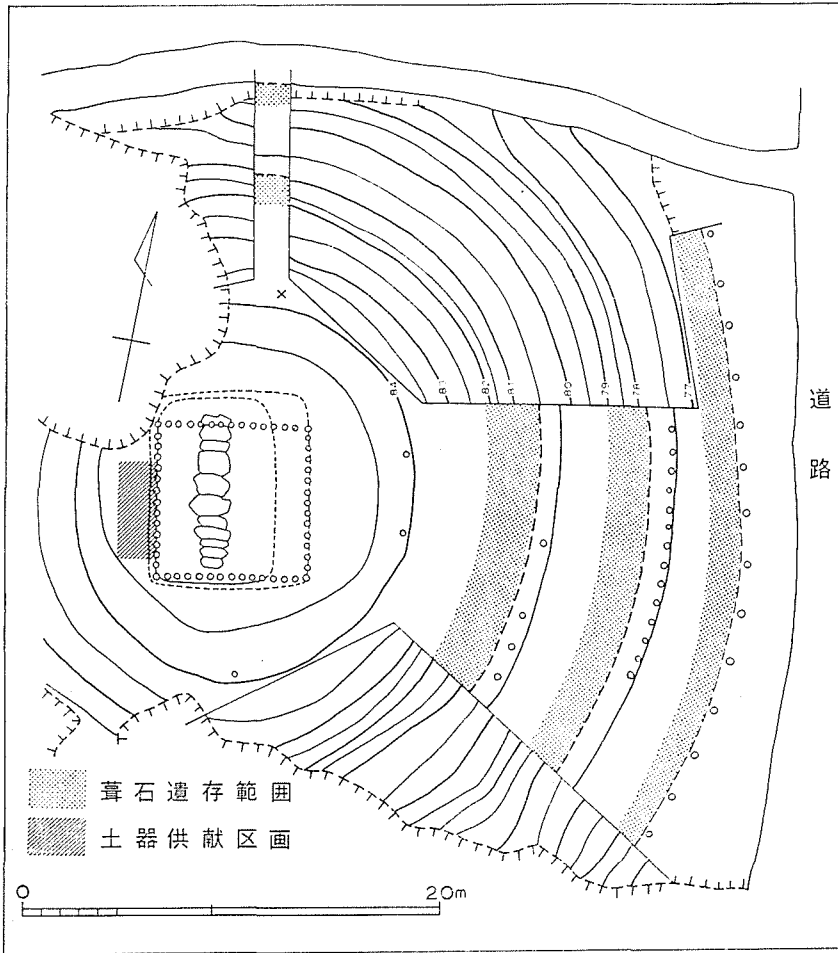
（都出比呂志）

本洋一、印藤和寛、河津行隆の参加があった。なお発掘に先立ち奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部の牛川幸喜、山沢義貴両氏に依頼して後円部主体の電気探査をお願いした。

墳丘の外形は前方部の先端が不明瞭であるが全長約九八米、前方部幅四五米、残存高は約三米、後円部径五七米、後円部の高さ九・八米（最高所の標高は八四・八米）の前方後円墳で、墳丘は向日丘陵の脊梁部を利用して築かれており主軸は北一二度西をさし前方部は先述した妙見山古墳と同じく南々東面する。

過去の調査

一九二三年、一九三〇年、一九四二年の三度にわたり前方部のほぼ中央で主軸に併行した竪穴式石室が調査されている。石室の方位は北一〇度西をさす。石室長は内ので約五・二米、幅は北端で九九糎、南端で九〇糎、高さは粘土床中央より天井石まで一・二九米（壁体高九七糎）ある。天井石は凝灰岩製？の割石で九個あ



挿図1 寺戸大塚古墳後門部発掘範囲(1/400)(山本忠尚製図)

り壁体には朱を塗抹し、壁体の控え積の部分のみにか粘土被覆がみられた。石室内には宣子孫銘の獣帯鏡、仿製方格変形獣文鏡、仿製三角縁三神三獣獣帯鏡各一面を含む多数の副葬品が出土している。^(注1)

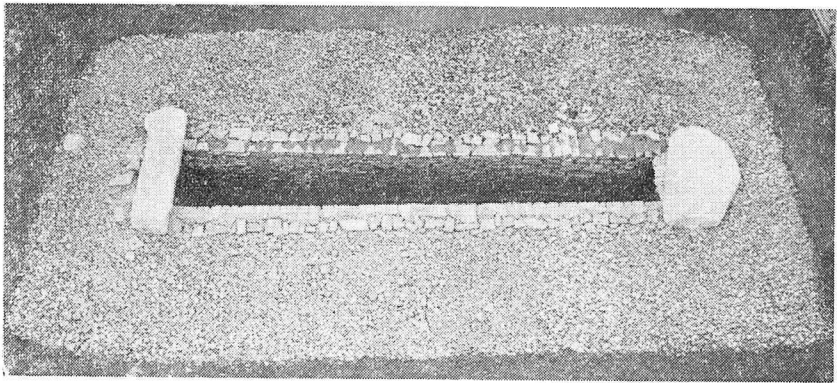
主 体 部

墳頂平坦面にまず一辺八米の方形埴輪列が認められた(挿図3)。埴輪列ならびに内側に敷かれた板石列、パラス等については一九六八年の第二次調査の記載との関連で一括してのべることにしここで触れない。

方形埴輪列は墳頂部のほぼ中央の位置を占めていたが主軸と併行した縦穴式石室は墳丘軸線より西側に片よって

た。石室をつくるための掘り方は二段になっていた(挿図1に破線で示す)。

まず墳丘をあらかじめ築造し、後円中心部とおぼしいあたりに、南北長約一〇・六米、幅約九・一米、深さ一・六米の一段目の掘り方をつくる。(掘り方のはじまる位置は埴輪の底より五五厘米下にある)。ついでその内側に長さ九米、幅五米、深さ二・一五米の二段目の掘りこみをつくる。掘り方の基底の四周(南西隅と東側の一部でしか確認していないが、おそらく四周になろう)には幅約四三厘米、深さ約一〇厘米の溝がめぐっている。丘陵面は南に向かって下るので確認はしていないが南東隅に排水溝がのびていたかあるいは一部深く掘り凹められていたかも知れぬ。次に厚さ三六厘米まで掘り方内全面にバラスをしく。その中央部に長さ約六・八米、幅約一・四米の範囲にわたってチャートの板石をしく。その板石の上をおおう状態で幅約一・七五米、長さ六・二五米、中央での厚さ二〇厘米、肩での厚さ四五厘米の粘土床をつくる。東側断面の所見ではチャートの板石の端と粘土端の間隔は一〇厘米あり、その部分だけバラスが斜面をなしていた。またこの間隔の部分、バラス上にはベンガラが附着がみられた。壁体に塗抹されたものあるいは粘土床の外側の部分にぬられたものが水分とけて流れたものであろうか。検討を要するところである(図版Ⅲ—1)。



挿図2 寺戸大塚古墳後円部石室(復原後)

粘土床の断面のベンガラは線より判断すると、まず浅いU字形に粘土床をつくりその全体にベンガラを塗抹する。つぎに内側両側に三角形の粘土をおく。その上に木棺をおき、木棺の内側に水銀朱をぬる。木棺の身をおいた後さらに両側にある程度の高さまで粘土をつめその上に棺外副葬品を置いたとおもわれる。この面の粘土上にベンガラは塗抹はない。木棺の両木口には木口おさえの粘土をつめ

であつた。

壁体にはチャートの板石を用いる。粘土床の肩から測つて高さ約一・三五米の位置までつむ。壁体のひかえには、壁体に接してチャートの板石一〜二枚を用いる他は、下段墓壇の上端まで大量のガラスをつめ、部分的に大きな栗石を意識的に加えて補強している。かくして出来た石室の長さは上端で約六・四五米、粘土床中央より測つて高さ一・六米、北端（頭部側）上端での幅八五糧、南端（足部側）上端での幅七六糧を呈する。

この石室の上に計一一個の天井石をのせる。うち三個は花崗岩であり、他はチャートおよび砂岩を用いている。それぞれの天石井の間にはチャートの板石をつめていた。類例は滋賀県瓢箪山古墳などでみられる。天井石の範囲のみをおおう形で幅約二米、長さ約八・二米、厚さ中央部で六五糧の粘土被覆をおこなう。最後に粘土被覆上全面に厚さ約一〇糧のガラスをしく。控えづみの上に粘土被覆はない。

二段目の墓壇上面と天井下面とが相応する。ついで一段目の墓壇をすべて埋めもどす。最後に墳頂平坦部のみか、さらに墓壇全体をおおう形で、場所により異なるが、厚さ五五糧ばかり土をもつて墳丘を再形成する。周囲はしらず墳頂部では再形成した墳丘の中央線にあわせて、一辺八米を呈する円筒埴輪列（合計五五

個の埴輪）がたてられ、板石が内側に二列にしかれ、方形内のみガラスがかなりの厚さで壇状につまれ、西側で土師器を使用した祭祀がおこなわれる。

調査の結果から後円主体部の築造過程を再現すれば以上のようなろう。

出土遺物

出土遺物は左記の通りである。

鏡（船載三角縁推定天王日月銘四神四獸鏡片一、船載三角縁仏獸鏡一）、埴製合子（楕円形のもの蓋のみ一、蓋身ともに揃ったもの一、円形で蓋身揃ったもの一）、硬玉製勾玉一、碧玉製石釧八、碧玉製管玉一九、鉄製鎌五〜六、短冊形鉄斧二〜三、有蓋鉄斧二、鉄刀子五、鉄剣四、鉄製素環刀大刀一を含む鉄刀九〜一二、中に鉋も含まれるか鉄鍔の茎とおもわれるもの多数。

盗掘をうけており石室より出土した平安末〜鎌倉初かとおもわれる土師質の皿数点がみられることにより他にも遺物が、特に頭部側にはあったかと推される。遺物の出土状態、個々のもの説明、あるいは古墳の構造よりみた問題点、古墳相互間の形式編年等についてはいずれ正報告においてのべたい。鏡のみにつき簡単にふれておく。

鏡について

石室北端（頭部側）の短辺の壁体に倒れかかった状態（あるいはたてかけた状態）で鏡背面を上に向けた三角縁神獸鏡の破片が一点出土した。鋭い鑄あがり、白銅色を呈した銅質よりみて舶載品であろう。唐草文帯の一部を含む外区の小破片である。復原径は二一・六糎。この鏡の特色は外区兩鋸齒文帯にはさまれた波文の部分である。普通は複線波文であるところが、本鏡では単線でも珠点を加えている。小林行雄氏の御教示によれば兵庫県求女塚古墳出土の三角縁天王日月銘唐草文帯四神四獸鏡が本例に最も近い。西田守夫氏より得た写真によると同範鏡の可能性が高い。

唐草文帯に注意すると、大分県赤塚古墳出土の二神二獸鏡、京都府椿井大塚山古墳出土天王日月銘四神四獸鏡例がある。また波文に珠点を加えた例としては、同じく椿井大塚山古墳より獸文帯天王日月銘四神四獸鏡があり、沖の島一八号遺蹟では天王日月獸文帯四神二獸鏡が出土している。京都府長法寺南原古墳では複線波文に珠点を加えた君宜高官銘獸文帯三神三獸鏡例がある。しかし諸例より判断して本鏡片は内区をまったく欠くも天王日月銘唐草文帯四神四獸鏡の可能性が最も高いかと推定する。

石室中央より南（尾部側）で三角縁仏獸鏡（図版ⅠおよびⅢ―2）一面が合子等の遺物と出土した。本鏡は同じ向日丘陵の北端近くにかつてあった百々池古墳出土の一鏡と同範品であることを、

東京国立博物館で実見した際にみつけた。百々池例は西田守夫氏の御教示によれば重量八八四瓦であるが、本鏡は八〇二・五瓦であった。同範鏡といわれているものの重量を測定してみるとかなり差異があるものが多く、いずれ検討したいが、あるいはこの事は鏡の鑄造の仕方とも関連するところが深いのではないかと考える。百々池例は文様全体の鑄出も悪く、型くずれとかさびのためもあり背面の図像ははっきりしない。本鏡にくらべ後鑄のものと思う。

本鏡でみると径に比して大きな鈕―径約三・七五糎―をもち（普通の三角縁神獸鏡では三・五糎位であるが）鈕座には二重に蓮弁様の花文を鑄だしている。つぎに有節弧文帯がある。外区は複線波文帯の両側に鋸齒文帯を配した通有のものであるが、鋸齒文がかなり大きい。

内区には円座をもつ大きめの六乳を等分に配し乳間に単像式の三神三獸をいれる。三神はおのおの結跏趺坐し膝前で両手を合せて禪定の印を結んでいる。羽あるいは翼かとおもわれる表現がわずかに細線化された一線で表出されている。一の座像は両側に飾付の三山冠をかむり胸には両乳が表現され、膝の横左右に三弁づつの花弁を表現する。蓮華座のつもりであろう。つぎに參龍氏に相当するの右向き龍にまたがる羽人、周囲に雲気あるいは靈

枝がみえる。通天冠をかぶった像、角のある怪物、三山冠をかぶった像で両側にやはり蓮弁が表出されている、角のある口を大きくあけた龍？小乳の下に魚一匹といったモチーフである。

この鏡背面のモチーフに非常によく類似しているのが、梅原末治氏の御教示によれば奈良県新山古墳出土の三角縁獣文帯仏獣鏡である。径は獣帯の部分のをぞくとほぼ本鏡になる。内区の文様は新山例では仏像に円光背あり、蓮華座の上に坐し、像の左右両側に蓮弁様のものを表出するが、本例ではこれらが先述した如く省略され、簡略化された表現となっておる。鋸歯文のあらいことも類似する。ただ鈕座はまったく異なっておる。しかし両者の製作箇所は無関係とはいえないのではないか。

これまで鏡背面の文様中仏像の表現がみられるものは他に七例しか知らぬ。夔鳳鏡に二種二面、画文帯仏獣鏡に二種三面（岡山県王墓山古墳出土品と、長野県御猿堂古墳と同型の千葉県沖古墳出土品）、三角縁神獣鏡に三種四面（新山古墳例、および同範品では、京都府棒井大塚山古墳と京都府百々池古墳出土の天王日月鏡二神二獣鏡、岡山県天神山古墳出土三神三獣鏡）である。新山例を含むこれら七種九面いづれも中国製の鏡である。本鏡も舶載・仿製の判断に苦しむが舶載品かと考える。

鈕座の蓮弁は隅田八幡画像鏡に一重の表出されたもの一例を知

るにすぎぬ。ただ本例のごとき蓮弁内の表現とはやや異なるが京都府トゾカ古墳、大阪府長持山古墳等から出土している尚方作神人歌舞画像鏡二種五面がある。また趣はやや異なるが『浙江出土銅鏡選集』中の画像鏡には、鈕座に蓮座様あるいは重畳たる山岳を示すかの如き表出が多数みられる。仏教文化の影響が鏡背面の文様にもあらわれだしたのは漢末以後のことで、本鏡も漢末三国代江南の地での製作になるものもたらされたものであろうか。日本における仏教文化の流入はもっと後に考えられておる。これももし仿製とするには帰化系工人の手になるものとするも問題が生じ、ひいては三角縁神獣鏡の出自に対する疑問にも答えるものがあるのではないか。

盗掘されていることを考慮しても、現在の出土品でのセット関係を検討してみることが必要である。詳細は本報告にゆずるが、例えば寺戸大塚古墳の前方部・後円部両石室出土の鏡群と百々池古墳出土の鏡のセットには非常に類似するものがある。仮に両者の年代を相近いとせんか、一括して得た鏡の一部を片方は伝世した後、前方部の石室に副葬した可能性がよい。このことは何を意味するか。前方部の被葬者がまさに次代をつぐものと認識されていたことを単に同墳埋葬ということではなく、別の観点からも示すものといえよう。しかも類似する年代を示すとすれば、

立地等を別にして例えば向日丘陵中での前期古墳群を大別南北二群にわけける根拠をうることもなろう。首長系列を示す古墳群中の鏡のセットの再検討は後におこないたい。(近藤喬一)

三 寺戸大塚古墳後円部墳丘の調査

調査経過

墳頂部方形埴輪列および内部主体は、一九六七年に調査したので、今回は、墳丘築成法、葎石、埴輪の確認を目的として保存の良好な墳丘の東半部を発掘した。

調査主体者 京都大学文学部考古学研究室(代表有光教一)

調査担当者 都出比呂志

調査参加者 中村徹也、山本忠尚、山中一郎、孫秉憲、峯麿、稲田孝司、田辺征夫、永島暉臣慎、関隆志、小南一郎、西弘海、川又正智、鳥居勝、西田道彦、丸尾兼平、川西宏幸、丹羽祐一、井田留里子、堀内規矩雄。以上のほか加藤修、藤丸詔八郎らの応援を受け、さらに京大考古学研究会の松村博、林敏之、喜多川氏からは測量面での援助を受けた。

また、奈良国立文化財研究所の牛川喜幸、伊東大作、佃幹雄、田中哲雄氏らには墳丘の写真測量を担当して頂いた。京大理学部

① 梅原末治「乙訓郡寺戸ノ大塚古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊 一九三三年)、梅原末治「山城における古式古墳の調査」(『京都府文化財調査報告書』第二二冊 一九五五年)

清水大吉郎氏には葎石石材の岩石鑑定をお願いした。土地所有者である寺戸区事務所、宿舍を提供していただいた石塔寺へと共に感謝の意を表したい。なお、調査期間は一九六八年七月一四日から九月二八日の二ヶ月半であり、発掘予算の一部は一九六八年度文部省科学研究費に負っている。

さて、調査は、トレンチ設定からはじまり、墳丘中心から三方向に幅二米のトレンチを放射状に三本設け、墳丘中心から東南方向のものを第一トレンチ、東方向のものを第二トレンチ、北方向のものを第三トレンチと呼んだ。墳丘は三段築成であるが、下から第一、第二、第三段と呼ぼう。北端の第三トレンチ付近で第一段が竹藪の開墾で削り取られている以外は、保存は良好であった。各段の斜面及び各段平坦面には葎石が遺存し、原位置にある葎石と崩落したそれとの区別は困難であったが、葎石中の埴輪片の混在の有無を手がかりとして作業を進めた。以上のトレンチ観察を

もとに、第一、第二両トレンチで挟まれる区域内の全面調査に移り、第一段のみは調査区域をより北方に拡張し、さらに墳頂部分を全面調査し、前年の方形埴輪列の外側の土器供献区画をも調査した。以上の発掘区域は挿図1に示すとおりである。以下項目別に調査結果を述べる。なお、方形埴輪列は前年に発掘したものであるが、ここで一括して記述する。

墳丘築成

前記のとおり墳丘は三段築成である(図版II-2)。墳丘裾平坦面を基底平坦面、その上に順に第一段斜面、第一段平坦面、第二段斜面、第二段平坦面、第三段斜面そして墳頂平坦面と呼ぶ。第二トレンチ部分での断ち割りの観察からすれば、第二段の半分以下が地山で、それより上が盛土である。地山上面の標高は後円部北端で八〇・〇米、くびれ部付近で七九・五米であるから、北から南にむかって緩かに傾斜する丘陵尾根を削り、整形して第一段および第二段下半部までを築成し、その削りとした土を盛りあげている。つまり墳丘の総高一〇米のうち半分が盛土である。断面観察によれば盛土は幾層にも分けて積まれ、その工程中、少くとも三回水平にならしていることが認められた。

さて、各段平坦面はいずれも幅一・二〜一・五米と一定している。他方、各段斜面の数値(単位は米)を高さ、水平幅、斜距離

の順に記すと、第一段は、二、三、四、第二段は三、五、六、第三段は四、七、八となつて、第三段目が最長となる。傾斜角度は各段斜面とも約三三度である。

葺石



挿図3 寺戸大塚古墳後円部墳丘葺石断面図

各斜面には葺石を貼りつけていたが、どの段においても斜面上半部の葺石は崩落して、下半部の葺石および平坦面に積み重なっていた。本墳の戦前の調査において梅原末治氏が「ハチマキ状の葺石」と呼んだのは、この状態を誤って表現したものと思われる。葺石の石材はチャート、砂岩の礫が多く、概して小形である。ただ第一段のみは基底部に三〇〇〜五〇〇厘大の石を根石として据えている。葺石の積み方は根石を据えたあと、裏込めの小石をつめて、その上に順次積みあげていったものと考えられる(挿図3)。なお基底部葺石の確認によって後円部直径は五四米となった。

墳頂部方形埴輪列

墳頂平坦面は直径一五米の円形であるが、この円の中央に埴輪を巡らした方形区画があった。方形の一边は約八米あり、東西の二辺は堅穴式石室構築用の外側土塹の上端にほぼ沿い、南辺は土塹南辺とほぼ一致するが、北辺は土塹北辺より内側に位置する。埴輪の内側に列に沿ってチャートの板石を並べ(挿図4)、小礫が埴輪列の内側に約二〇厘の厚さで敷きつめられていたから、この方形埴輪列にとりまかれた方形の低い壇が存在したと考えられる。埴輪は円筒基底部約二〇〇〜三〇〇厘を残しており、方形の各辺に一三〜一四個、合計五三個樹立し、さらに北辺のやや西よりの内側に一個、西辺中央の内側に一個あった。

埴輪列は、円筒埴輪と朝顔形埴輪とからなる。破片の接合が完了していないので、この両者の配列順序は明確でないが、円筒埴輪二〜三個に対して朝顔形埴輪が一個の割合である。円筒底部の直径は三五厘前後のものが最も多く、北西隅と南西隅には直径が五〇厘に達する大形品を配していた。これら円筒埴輪と朝顔形埴輪の特徴については、墳丘斜面のそれと変らないので、あわせて後述するが、この埴輪列中の破片の中に、ヘラ描き沈線による幾何学的文様を施したものが数片あって、定式化した形象埴輪とは考えられないが、円筒埴輪や朝顔形埴輪とは区別される。

土師器供献区画

方形埴輪列西辺の外側に辺に接して南北五米、東西二米のほぼ長方形の範囲に土師器片が密集していた。このような土師器片は方形列の北・東・南の各辺外側には一片すら見出せなかったものである。土師器は小片となっているが、小形丸底壺、複合口縁を持つ小型壺、高杯などの器種を含んでおり、それぞれの器種について数個体づつ認められる。また大きく外反する杯部内面にヘラ描き沈線で鋸歯文を施した特殊な高杯がこの区画から検出された。したがってこの土師器片散布区画は石室を土で覆った後の供献儀式の場所を示していると考えられる。西辺の両隅に大型円筒を配していたこととあわせ、興味深い事実である。なお、これら

の土師器の示す特徴は、大阪府小若江北遺跡出土品との類似点が多い。

斜面平坦部埴輪列

それぞれの段の平坦面に円筒埴輪列が巡らされていた。遺存状態は下にゆくほど良好で、基底平坦面埴輪列は円筒の底部約二〇〜三〇纏を残すものもあったので、配列状態を正確に把握すること



挿図4 寺戸大塚古墳後円部墳頂方形埴輪列北辺(東から)

ができた。すなわち、それぞれの円筒の間隔は約二米あって、発掘範囲内で計一四個遺存していた。特に注意すべきは、このうちの五個は、焼成後、円筒部を円筒に直交する平面で途中から切断し、切断面を底として樹立していたことである。埴輪上面の高さを揃えるための処理なのか、運搬中に壊れたものか、或いは個数が不足したために完形品一本を二本として水増ししたためなのか、判断はむづかしいが、興味ある事実である。

第一段平坦面の埴輪は、円筒基底部の五〜一〇纏をかううじてとどめる程度であるが、配列間隔は約一米であり、一四個検出し得た。また第二段平坦面の埴輪は現位置をとどめるものに乏しいが、配列間隔は約一米と考えられる。墳頂肩部の埴輪列は基底部をわずかにとどめるもの三個を検出し得たのみで、配列間隔は不明である。このように、第一、第二兩段平坦面の埴輪列は密度

高く配列し、その位置も段平坦面とその下の斜面との境の肩部近くにあるのに対し、基底平坦面埴輪列のみ配列間隔が粗で、しかも葺石根石に接してならべている点に配列法の差を認めることができる。これら埴輪樹立のための掘方の検出には、注意をはらったが、第一、第二の各平坦面埴輪列は肩部に位置しているため流土が多く、明確な掘方は検出できず、かろうじて、基底平坦面埴輪列の一箇所において、一辺約五〇糎の隅丸方形で深さ約一〇糎の掘方を検出した。これが他の埴輪の場合にも同じであったとすれば、円筒埴輪一本ごとに穴を掘って埋めたものと考えられる。

円筒埴輪の編年論的位置づけ

墳丘の各平坦面の埴輪中には形象埴輪は一片もなかった。現位置をとどめるものは、すべて円筒の底部であったが、その周囲に円筒埴輪および朝顔形埴輪の口縁片が遺存していた。しかし転落による移動が激しいため、完全に一個体に復原できるものは極めて少ない。したがって、円筒形と朝顔形とがどのような関係で樹立されていたかの復原的考察はむづかしいが、墳頂部方形埴輪列においては、円筒形二〜三本につき一本の割合で朝顔形が認められるのに対し、墳丘各平坦面の埴輪列にあつては、朝顔形の比率がより少ないことを指摘し得る程度である。

これらの埴輪の円筒底部の直径は方形埴輪列中に径五〇糎の特別に大きいものが一本あつたが他の大部分は三五〜四〇糎の範囲にあり、接合が完了していないので高さは不明である。円筒埴輪の口縁部は少し外方に開く傾向を持ち、口縁端部の細かい特徴で二つのタイプに分かれる。また朝顔形埴輪の上半部の壺の部分は器壁の薄いものが多い。

円筒埴輪、朝顔形埴輪を通じて、透し孔は三角形と縦長方形であり、円形はない。外表面にはベンガラを塗布している。タガの特徴はバラエティに富み、その断面でいえば幅〇・七〜一・二糎に対して突出の長さは一・五〜二・三糎の範囲で変化し、全体に突出度が強い。成形技法は底部の下端を幅約一〇糎の粘土帯でつくり、その上に幅二〜三糎の粘土紐を巻きあげたのち、外面をタテ方向の刷毛目で調整し、その上に貼りつけたタガの上を、軽くヨコナデしている。内面の多くはユビナデによって調整するが刷毛調整したものもあり、このような技法の差からいくつかのタイプに分けることができる。

畿内他の古墳出土の円筒埴輪との比較研究によれば、このように外面をタテ方向の刷毛目で調整したのち、突出度の強いタガを貼りつけ、タガの上をヨコナデする特徴を持つ円筒埴輪は前期古墳出土の円筒埴輪の中でも古い要素を示し、タテ方向の刷毛目

調整のあと、タガを貼りつけ、その上をヨコナデしたあと、さらにタガとタガとの間を横方向の刷毛目で再度調整する特徴を持つものは新しい傾向を示す。さらに、この二回目の横方向の刷毛目調整を省略したものは、後期以降の円筒埴輪に見られる。したがって、本墳の内部構造や副葬品から考え得る編年の位置と、以上の埴輪製作技法との間には相関関係が認められるのである。

壺 棺

墳丘北部の第三トレンチ内において、墳頂平坦面の肩部で一個の壺形土器を検出した(挿図1の×印)。卵形の胴部に屈曲して

四 元稻荷古墳前方部墳丘の調査

過去の調査

元稻荷古墳は、京都府乙訓郡向日町大字向日小字北山にあり、南北に長い向日丘陵南端の標高五六米に位置している。つまり向日丘陵の古墳時代前期の古墳群のうちでは最南端にあたり、標高も最も低い位置にある。本墳は南面する前方後方形を呈するが、一九六〇年、向日町水道局が、貯水槽を後方に建設した際、西谷真治氏を中心とする京大文学部考古学研究室の人々によって事前調査が実施された。この時は、墳丘外形の測量、後方部主体の

垂直に立ち上がる口頸部を付した壺形土器で、口縁径は二〇厘米。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整し、胴部外面はタテ方向の刷毛目、内面はタテ方向のヘラ削りで調整している。大阪府船橋遺跡〇—I層出土品に類似する。この土器は表土直下から出土したが、墳丘肩部にあったため流土が著しく、壺の底部に接して掘方らしき窪みをかろうじて検出し得たのみであるが、もとは壺を掘って埋め込んでいたものと考えられる。墳丘築成後に埋められた壺棺と推定しておきたい。(都出比呂志)

発掘、後方部墳丘斜面葎石の一部が調査されたが、調査期間の制限を受けたため、墳丘全体についての十分な調査は行われなかつた。

(注1) この前回の調査結果については、既に報告書が刊行されているので、詳細はそれにゆずるが、後方部中央に竪穴式石室を築き、盗掘のため副葬品は少なかったが、銅鏃一本、および、鍔・刀剣・槍・矛・石突・刀子・錐・鉈・斧などの鉄製品、そして土師器壺一個が遺存していた。盗掘を受けなければ、本来は副葬品の豊富

な古墳と考えられる。

今回の調査

今回の調査は、本墳の土地所有者である向日神社が、前方部を売却し、その近くに結婚式場を建設する計画をたてたので、前方部をも含めた本墳の現状保存をはかるために、前方部の裾の確認とあわせて、前方部墳丘の葺石、埴輪の検出および前方部主体の有無の確認を目的としておこなった。

調査主体者 京都大学文学部考古学研究室（代表有光教一）

調査担当者 都出比呂志

調査参加者 川又正智、永島暉臣慎、岡内三真、川西宏幸、丹羽祐一、吉田恵二、小林謙一、末本信策、篠原徹、瀬戸和樹、和田晴吾、大朝利和、滝山昌彦、掛井真樹、瀬川健、西口寿生、岩根謙一、鈴木きみ子、上坂照代。調査は一九七〇年七月二七日から九月二六日の二ヶ月にわたった。

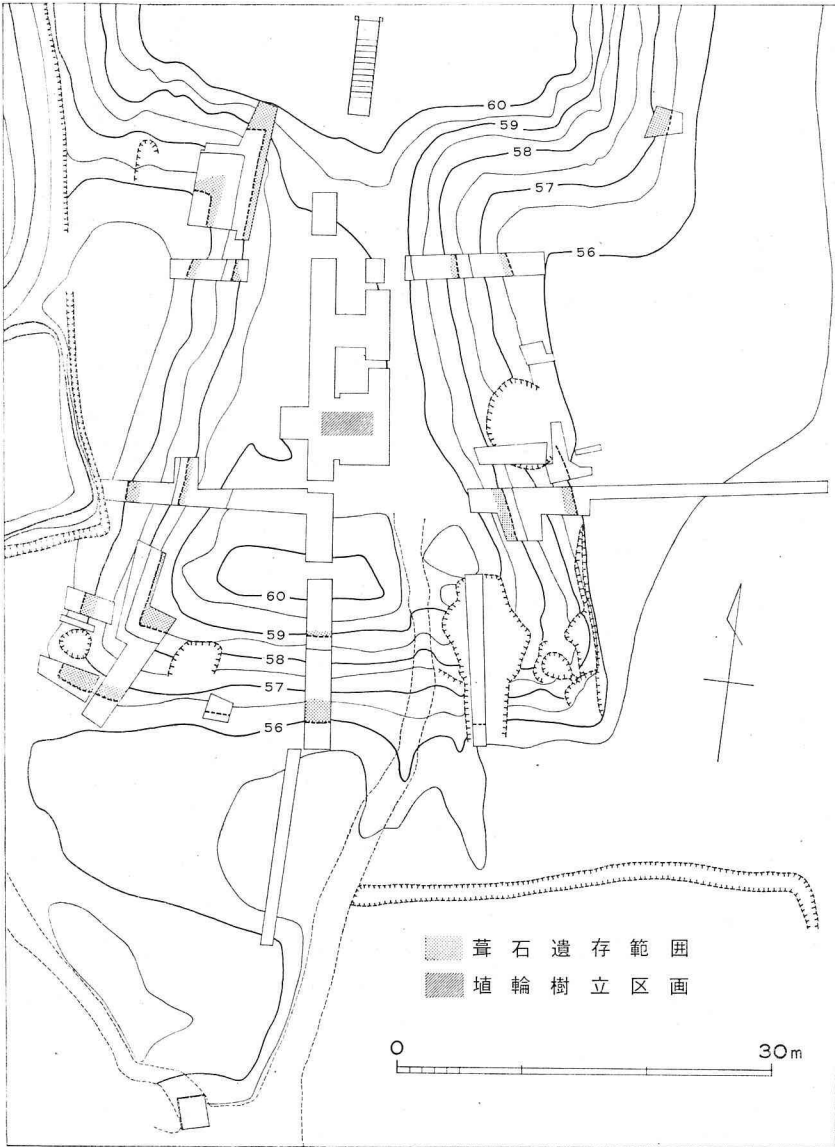
この調査に対して発掘を承諾して頂いた本墳土地所有者向日神社、宿舎を提供していただいた石塔寺の武田日行、故谷口日文兩氏はじめ御家族の方々に感謝の意を表したい。発掘調査の結果、以下に述べる成果を得たが、地元の乙訓の文化遺産を守る会を中心とする保存運動の結果、六十部克己宮司をはじめ向日神社の理解を得、さらに向日町当局の努力の結果、本墳を後方部、前方部と

もに町が買い上げて保存することに決定した。後方部石室は前回の水道局の工事で破壊されているとはいえ、近畿地方で数少ない前方後方墳の全形が現状保存されたのは喜ばしいことである。

以下調査経過を略述する。まず挿図5のように、前方部主軸線に平行する幅二米のトレンチ及び、くびれ部と前方部墳頂南端とにおいて、主軸と直交するトレンチ二本を設定した。その結果、二段築成の各斜面に葺石を確認し得たので、くびれ部については保存のよい西側を選んで発掘面積を広げた。さらに後方部南東隅を確認するためのグリッドを設定した。また、前方部中央付近、主軸に平行するトレンチ内で埴輪片が密集する部分があったので、その区域を広げて、埴輪片の散布範囲を確認した。また墳丘築成のあり方を見るために、東南部の、南北に長い崩壊部分と東側の南部トレンチで墳丘を地山直上まで断ち割り、断面観察を行なった。なお、前方部東肩の地下に水道管が敷設されているため、墳丘を東西に横断するトレンチは設定できなかった。以下各項にわけて調査結果を述べることにしよう。

墳丘築成

前回の調査の際の墳形測量によって本墳の規模は判明していたが、それによれば、全長八四米、後方部の一辺五四米、後方部の高さ七米、南端部における前方部幅四三米、前方部の最高部の高



挿図5 元稲荷古墳前方部墳丘発掘範囲 (1/600) (川西宏幸製図)

さ三米とされている。今回の葎石検出による裾の外郭線によれば、後方部幅五二米、前方部南端幅四六米と修正すべきこと、くびれ部における前方部幅は二二米となることが明らかとなった。

さて、墳丘築成前の旧地表の標高は前方部中央で五七米、南端で五五・七米となるから、墳丘は北から南にむかって比高差二・三米内外のゆるやかな傾斜をもつ丘陵尾根上に築かれており、前方部墳丘の大部分は盛土である。この封土内からは、先土器時代のナイフブレードをはじめ、弥生式時代中後期の土器片多数と石庖丁、石鏃、石錐および焼土などが検出され、墳丘と旧地表とのあいだに、厚さ一〇～二〇厘の黒色土層が認められるので、この古墳の直下および周辺の弥生式時代の集落遺跡を破壊し、その土を封土として使用したと考えられる。また前回の調査で前方部墳丘南端とその南方約二〇米の土塊状に小高い部分とによってはさまれる平坦な窪み、および前方部東方の平坦地が、空濛ではないかと想定されていたが、今回、墳丘外の南方および東方にトレンチを延長して調査した結果、南と東の若干低い平坦地は前方部築成の際、盛土用に削りとったあとであり、南方の土塊はその際の地山の削り残しであることが明らかとなった。

墳丘斜面と葎石

前方部は二段築成である。下から順に基底平坦面、第一段斜面、

第一段平坦面、第二段斜面、と呼ぶことにする。各段の斜面には葎石が貼りつけられていたが、西側と南側の第二段斜面葎石の根石が砂岩やチャートの石材を使い、三〇～四〇厘大の大きいものであるため、確実な裾の線を把握したが、他の部分では全体として小礫を使用しているため葎石下端は不明瞭であった。また各段斜面の上半部の葎石は崩壊して下半分に重なっているため、葎石遺存範囲は挿図5のようになる。

葎石の貼りつけ方は、根石を据えたのち、小礫を根石の裏にこめ、その上に順次積み重ねてゆくという前期古墳に普通に見るあり方をしているが、西側くびれ部で検出した後方部第二段斜面下半部の積み方は、裏込めの小礫をつめず、大きな礫をマイルばりのごとく一重に斜面に貼りつけるという特異な積み方をしていた。またこの西側くびれ部での後方部と前方部との葎石の差異(図版N-1)は、両者が連続工程で積まれなかったことをも示しているのである。

葎石の裾の検出によって、第一段平坦面も確認できたが、それによれば、平坦面幅は平均一米である。各斜面の水平距離は、第二段では三米前後で一定するのに対し、第一段のそれはくびれ部付近では三米であるが南にゆくにつれて広くなり南西では四米となる。傾斜角度は一七～二二度である。平坦面の高さは同一平面

上になく、基底平坦面も第一段平坦面ともに前方部西側は東側より、平均約〇・四米高くなっている。さらに第一段平坦面はくびれ部から南にゆくほど高くなり、墳の南端において最も高く、その差は約一米にも達する。これは前方部が南端で急激に高くなる外形とも対応している。このことは斜面の斜距離にも影響しており、クビレ部付近では第一段斜面、第二段斜面ともに三・三米であるのに対して、前方部南端正面では、第一段斜面五・七米、第二段斜面三・三米となつて、南端部第一段斜面の斜距離を著しく長くとしている。この築成法は、前方部正面を大きく見せる効果を生んでいるといえよう。

なお以上の斜面や平坦面においては埴輪片は一片も検出し得ず、墳丘をめぐる埴輪列のなかつたことが判明した。

前方部内部主体の有無

今回の調査において、当初は前方部における埋葬主体の有無の確認をも意図していたが、前方部中央における埴輪の検出に多くの時間を費した結果、主体確認の作業としては、埴輪区画直下及び、前方部主軸線に平行するトレンチを地山まで掘り下げるにとどまった。したがって主体部がないと断定するには不十分であるが、しかし少なくとも大きな土壇を掘り込んでその中に竪穴式石室を構築するような、大がかりな主体部がなかつたことは動かな

いと思われる。

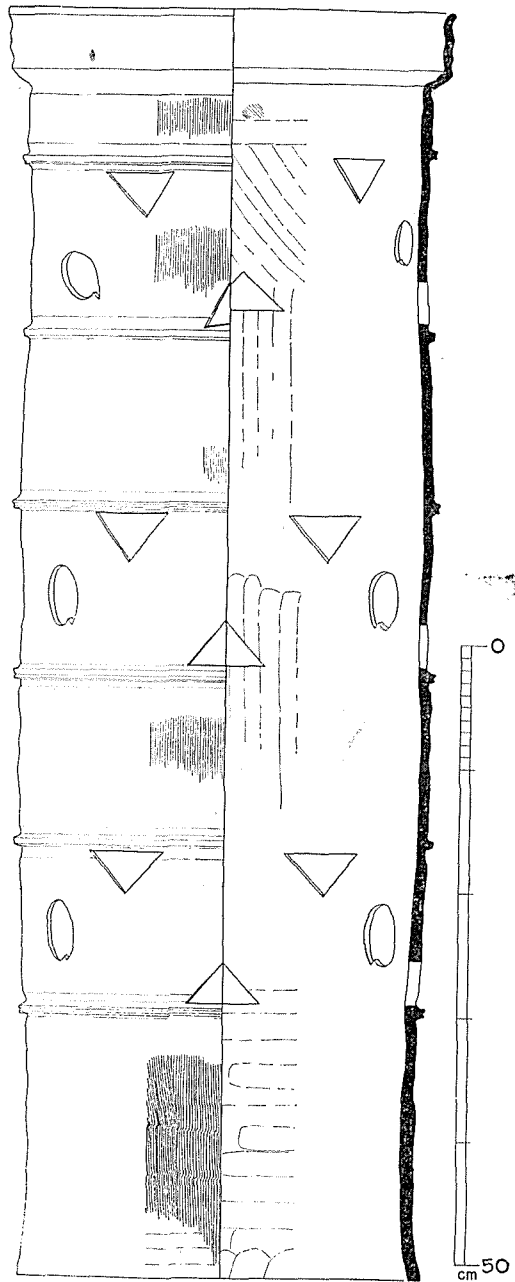
埴輪および壺形土器供献区画

墳丘肩部や斜面平坦面には埴輪を樹立していないが、前方部のほぼ中央に埴輪片と壺形土器片の密集する区画があった。破片の密集する範囲は挿図5に示すとおりであるが、南北約二米、東西約四米の長方形の中におさまる。破片は地表下一〇～三〇糎の範囲で出土し、小片となつて散乱していた。このうち、かろうじて円筒埴輪の一個が底部を約五糎程度の高さで残して樹立された状態をとどめていた(図版Ⅴ-2)。

現在、これらの埴輪は川西宏幸、西口寿生によって復原中であるが、円筒埴輪片は六～七個分に分類できる。

その形態を復原できた一例で示せば、挿図6のとおりである。頸部から外へ屈曲して垂直に立ちあがる口縁部を有し、タガで区画された胴部に無文帯と透し孔文様帯とを配している。透し孔は三角形と変形巴形とからなり、変形巴形の透し孔は円周上に四個あつてそれぞれ対向位置に配されている。さてその規模は、口縁径三六糎、底径三二糎、口縁から底部まで完全には接合し得ぬたゞ、高さは明確さを欠くが、総高一〇三糎と復原できる。器壁の厚みは平均〇・七糎、底部第一段のみ一糎と厚くなる。タガは断面ほぼ正方形で幅〇・七糎、突出は〇・六～〇・七糎である。な

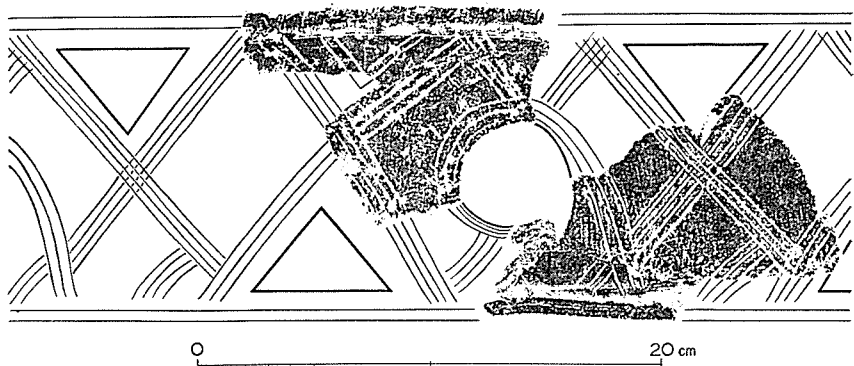
挿図 6 元稻荷古墳出土土師筒埴輪 (1-6) (川西宏幸実測・製図)



お、挿図 6 に示した一例はタガとタガとの間に透し孔を配するのみであるが、透し孔の周囲をヘラ描きの沈線による直線と曲線とでうめている別の個体があり、その文様の一単位を展開図で示せば挿図 7 のようになる (図で上段の二個の三角形透孔ではさまれる部分が一単位)。このヘラ描き文様も個体によって差があり、三種類に分かつことができる。さてその成形と調整の技法は、外面はタテ方向刷毛目の上を軽くヨコナデし、内面はヘラ削り調整

のものと刷毛目調整のものがある。また胎土は砂粒の含有の度合でいくつかに分類できる。また、六〜七本のすべての外面に、ベンガラを厚く塗布している。以上に見るように、これらの埴輪は、成形・調整において丁寧なつくりである。

さてこの種の埴輪の類例を既に発表されたものに求めれば、岡山県都月一号墳出土のものがあり、^(注2) 形態、大きさで殆んど差異を認められない。ただ異なる点の第一は、本墳出土の六〜七個のう



挿図7 元稲荷古墳出土埴輪単位文様(都出製図)

ち三〜四個は透し孔の周囲のヘラ描き沈線文を省略していること、第二は、都月一号墳例に見るような口縁部の鋸歯文の省略や、タガとタガとの間の沈線文様の構成原理での微妙な差のあることである。文様の構成原理で比較すれば、本墳例は都月一号墳例とは、同一型式内に位置しながら、わずかに後出的と考えられる。

他方、壺形土器は、五〜六個分の

破片がある。その形態は、胴張りの強い球形の胴部に、ほぼ垂直に立ち上る頸部を付し、その上に、屈曲して外反する、いわゆる複合口縁を付する形態で、底部に直径十数厘の円孔を焼成前に穿っている。口縁径は三七厘、胴部最大径三六厘、高さは復原を完了していないが三五〜四〇厘となる。器壁の厚みは一厘内外である。その調整技法は口縁部内外ともヨコナデ、胴部外面上半はタテ方向の刷毛目、下半はタテ方向のヘラ削り、胴部内面はヨコ方向の指ナデ、下半はタテ方向の指ナデで処理している。これら五〜六個の土器は砂粒の含有の度合によって二種類に分かれる。この壺形土器の形態や製作技法もまた都月一号墳例と類似点を有している。

以上の埴輪と壺形土器とは、接合し得る破片の出土位置を検討した結果、破壊後あまり原位置を変えていないことが判明した。また前述のように一個の埴輪は樹立した際の底部をかるうじて原位置に残していたから、これら六〜七個の埴輪が長方形区画内に一定の間隔をおいて樹立されていたことが想定できるし、埴輪片と壺形土器片とは、まんべんなく混在していたから、壺形土器は円筒埴輪の上に載せられていたと考え得る。その場合、円筒埴輪口縁径と壺形土器の胴部径とを比較すると壺形土器胴部の下半部は円筒内にかくれることになる。

以上のように本墳においては、長方形区画内に壺形土器を載せた円筒埴輪が六〜七個樹立されていたわけであって、都月一号墳例のように墳丘斜面肩部に巡らす樹立状態とは異なっているし、畿内の前期古墳に普通に見られるように墳丘肩部や斜面平坦面に巡らすあり方とも異なっている。前回の調査の際、後方部斜面でも数片の円筒埴輪片が採集されているから、もしこれが、後方部頂上部に樹立されたものが流れたものとすれば、後方部頂にも同種の埴輪区画が存在したものと考え得る。

円筒埴輪起源問題

ところで、近藤義郎・春成秀爾両氏は都月一号墳例や本墳例のような特徴をもつ円筒埴輪が、岡山県を中心とする地域の弥生式時代の特殊器台からの系譜を持ち、前期古墳に一般に見られる普通の円筒埴輪に転化する直前の型式と認定して、埴輪の起源論に新見解を提示した。たしかに都月一号墳例や本墳例のような形態、とくにその屈曲する口縁部の形態を瀬戸内地方の特殊器台からの系譜関係で説明する点は理解できる。しかし、他方、口縁部が垂直の定形化した円筒埴輪は、本墳例のごとく屈曲する口縁部が退化消滅し、口縁部が垂直に変化する過程で発生したものととして、一元的に把え得るのであろうか。

そこで、これまで円筒埴輪として一括されてきたものの口縁部

に注意すると、口縁端と口縁直下のタガとの間隔が特別に狭く、幅四〜五纏を示し、口縁部が若干外反する特徴をもつものがある。大阪府御旅山古墳^(注3)、同紅葺山古墳^(注4)、岡山県金蔵山古墳^(注5)(報告書でAS-4とされているもの)など、実測図の発表されたものの中にもこの種の円筒埴輪があり、四世紀末〜五世紀前半に編年されているものに類例が多い。その口縁部の特徴は、本墳例や都月一号墳例のような屈曲する口縁部が退化した形態として説明するのが最も自然である。また大阪府池田茶臼山古墳^(注6)、京都府興戸古墳^(注7)出土の、口縁部が急角度で外反する円筒埴輪も同じ扱いをしてもよいと思われる。この種の円筒埴輪は、円筒の口縁から底部までを三〜四本のタガでほぼ等間隔に区分する普通の円筒埴輪とは形態的に区別し得るし、それぞれの古墳において普通の円筒埴輪と共存して配列されている。いわゆる有縁円筒には、この特徴を有するものがある。岡山県金蔵山古墳例のように、この種の円筒埴輪の上に蓋形埴輪をのせる場合もある。したがってこの種の円筒埴輪は、本来その上に他の埴輪を載せる器台としての用途を意識されていた可能性が強い。単純化を恐れずにいえば、定形化した段階での普通の円筒埴輪は、ただ「配列のための円筒」であり、この種の円筒埴輪は「ものを載せる器台円筒」である。ところで、都月一号墳出土の公表された資料の中には、本墳例のごとき、屈

曲した口縁部をもつものに混じって、口縁部が垂直に近く、普通の円筒埴輪に近いものがある(近藤・春成両氏がC類と呼ぶもの)。

このように円筒埴輪を普通円筒と器台円筒とに分類する立場に立てば、都月一号墳例や本墳例のごとき屈曲した口縁を持つもの、およびその退化型式は、直線的に普通の円筒埴輪の形態に転化・消滅したのではなく、器台円筒として命脈を保ち、普通の円筒とは区別され、かつそれとセットをなして、少くとも五世紀前半までの古墳で共存して樹立されていたと考える。つまり、器台円筒と普通円筒とを、単純に前後関係として把握のではなく、セット関係として理解しようとする立場である。

では、普通円筒は、どのような系譜でいつ発生したのであろうか。近藤・春成両氏のごとく普通円筒を器台円筒の退化形式として認識する立場に立てば、普通円筒もまた、弥生式時代の特殊器台から都月型の、屈曲した口縁をもつ器台円筒を経る系譜ですべて説明しつくされることになり、都月一号墳中に普通円筒に近いものが共存することを以て、この段階で器台円筒から普通円筒が枝分れするとも考えられよう。しかし本墳出土の器台円筒は都月一号墳例よりもわずかに後出的な要素を持ちながら、普通円筒を伴していない。それは本墳においては、埴輪が墳丘を圍繞するのではなく、前方部の一区画に集中的に樹立されている配置と

も関係すると考える。何故なら、普通円筒は、多量に配列すること、を契機に発生すると考える立場に立つからである。

以上のように考えれば、最古の普通円筒とも呼ぶべきものの出現時期の範囲はより限定し得ることとなる。しかし厳密を期するためには、壙と器台との結合の産物としての朝顔型埴輪をもあわせて、前期古墳出土埴輪の編年的研究が急がれるのである。この課題の解決は正報告書において果すこととしたい。(都出比呂志)

- ① 西谷真治「向日町元稲荷古墳」(『京都府文化財調査報告書』第三三冊 一九六五年)
- ② 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」(『考古学研究』第三三卷三号 一九六七年)
- ③ 大阪府教育委員会「羽曳野市壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報」(一九六八年)
- ④ 西谷正「紅葺山及岡本東地区遺跡の調査」(『高槻市文化財調査報告書』第二三冊 一九六六年)
- ⑤ 西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」(『倉敷考古館研究報告』一一九 五九年)
- ⑥ 呷田直「池田市茶臼山古墳の研究」(一九六四年)
- ⑦ 梅原末治「田辺町興戸の古墳」(『京都府文化財調査報告』第二二 冊 一九五五年)

近藤 喬一 (平安博物館講師)
都出比呂志 (京都大学文学部助手)